

デジタル端末を使用した放課後学習キャッチアップ ～大学生ボランティアと一緒に～

After-school learning catch-up project using digital terminals
～With college student volunteers～

岩間夏美¹⁾

指導教員 服部南見²⁾

1) 創価大学 法学部 法律学科

2) 創価大学 学士課程教育機構

キーワード：貧困、通信格差、GIGAスクール構想、ボランティア

1. はじめに

現状日本では、「貧困層」にあたる世帯と貧困層ではないが、所得が低い「低所得層」が一定数存在している。八王子が日本有数の学園都市であり、大学生が多いことを活かした「放課後デジタル学習キャッチアップ」を提案する。

2. 背景

文部科学省が進めている「GIGAスクール構想」(以下:同構想)の実現により、家庭の所得額に関係なく、国内に存在するほぼ全ての公立学校に通っている小中学生が1人1台の端末を持っており、令和3年3月末時点で約97%の公立小中学校への配布が完了している。^①これに加えて、昨今のコロナ禍に伴った休校やオンライン授業の開始により、「学校の授業が分からないと感じることが増えた」と答えた生徒のうち約36%は貧困層であった。^②教員不足やGIGAスクール構想による新たな授業方法の導入により、教師のやらなければならないことが増加し、教員の残業時間は増えている。残業時間の多さから、現在の小中学校の教員には、授業の内容が分からぬ生徒に対し放課後に学習サポートを実施する時間は無いことが分かる。

3. 現状分析

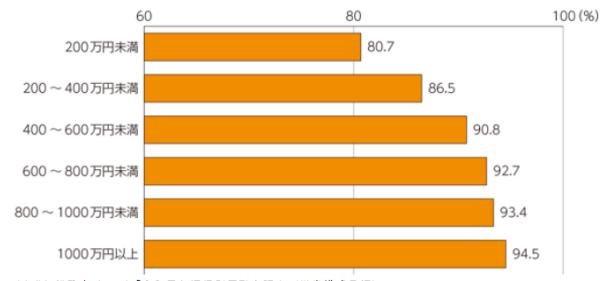
同構想は、八王子市でも実現しようとしている。ま

た、八王子市は日本でも有数の学園都市であり、大学数、学生数共に多い。加えて大学生のボランティア参加率は年々増加しており、ボランティアへの関心が高くなっていることが示されている。^③

4. 課題

同構想の実現により、1人1台の端末を持つことはほぼ達成されたと考える。しかし、貧困・低所得世帯にはそもそもWi-Fi環境が無く、家に持ち帰っても使えない状況にある。^④(図1)そこで生じてしまうであろう格差を無くす為、端末を持ち帰ることを禁止している学校もあり、支給された端末を使うのは学校内に留まっている。

図1 個人の過去1年間のインターネット利用経験



併せて、教育学部の学生は3,4年生になるまで教育実習に行くことができないため、学んだことを実践できる場が無い。模擬授業を行う機会もあるが、授業の相手は子供役の大学生であるが故に、実務経験を積めたと言うには難しい。筆者が通っている大学の教育

学部も教育実習に行けるのは大学3年生からであり、学部生2人によると、「教育学部において学ぶのは4年間だが、実務経験を積む時間が圧倒的に少ないので、不安だ。」「塾講師のバイトをするのも時間の都合上難しいため、実際に子供に勉強を教える機会が欲しい。」との意見が上がった。これらの現状の解決のため、「放課後デジタル学習キャッチアップ」を提案する。

5. 提案

提案内容は以下の通りだ。

【場所】学校が終わった公立小中学校

【形式】オンラインと対面どちらかを選択可能

【時間】平日、放課後午後4時から午後6時まで

【対象】端末を自宅で使えない小中学生、教育学部生のみでなく、教育に興味を持つ学生全員

【費用】全て無料

場所を学校が終わった小中学校にした理由は、大学生が小中学校に赴くことで、将来実際に働く環境とほぼ変わらない状態で子供に勉強を教えることができるからだ。また、オンライン選択も可能である為、対面とオンライン両方の経験を積める。加えて、オンラインの場合は1対1、対面の場合は少人数指導とし、1人の大学生につき最大2人の生徒までとする。そして、生徒と学生どちらの負担にもならぬよう、拘束時間は1時間から最長でも2時間にしている。対象は、端末を自宅で使えない小中学生とし、中学生は高校受験対策も出来るものとする。その場合は生徒の志望高校出身の大学生に勉強を教えてもらうことも場合によっては可能である。なお、本プロジェクトは全て無償で実施される。

本プロジェクトでは、学校から貸与されている端末を放課後にICT環境が整備されている小中学校の教室で使用する為、貧困・低所得層の小中学生に授業外でデジタル端末を用いた学習力をつけてもらうことが可能であり、デジタル・デバイドを解消することができる。受験対策をしたい中学生に関しては、その高校の出身者から学べるため、受験対策だけでなく、志望校の雰囲気、学校生活の様子を知ることもできる。また、教育学部の学生は子供に勉強を教える機会を得

られる。実際に実務経験とほぼ変わらぬ形で勉強を教えられるため、学生が教員になった時の学校の雰囲気や「生徒に教える」という経験を確実に積むことができる。更に、現在学んでいることを実践する機会を得ることができる。

6. 結論

本提案により、小中学生の通信格差による教育格差と学生の実務経験を教育実習の時までに積めないという問題を解決する。そして、世代内交流も強い誰1人取り残さない八王子を目指す。

7. 引用

- 1) 文部科学省,GIGAスクール構想の実現について7頁
<https://bit.ly/3Tc78bT>
- 2) 総務省,子供の生活状況調査報告書 101頁
<https://bit.ly/3gfkS7g>
- 3) はちおうじ学園都市ビジョン 17頁
gakuentoshi_vision_honpen.pdf
(city.hachioji.tokyo.jp)
- 4) 総務省,令和2年情報通信白書
<https://bit.ly/3D95PoJ>